

能楽鑑賞にあたって

能楽とは

能楽=能+狂言。

能は死者のミュージカルで悲劇、狂言は生者のセリフ劇で喜劇(コント)。

複式夢幻能

前場と後場の二場構成になっているのが複式能。前場ではシテが仮の姿で現れ、後場では真の姿で現れる。

旅僧の夢の中に亡霊や神仏が現れて舞うのが夢幻能。

この二つの要素がセットになっているパターンが多く、それを複式夢幻能という。

『賀茂』は二場構成で神が出てくるが、旅僧が寝てないので夢幻能ではなく、単に複式能。

登場人物

シテ

主役。歴史上有名な人物(武士や平安貴族など)、または神や鬼の役。シテ方能楽師には、かんぜ ほうしょう こんぼる こんごう きた観世・宝生・金春・金剛・喜多の五流派が現存。複式能では前シテ・後シテにわかれ、同じ役者が演ずる同じ役だが出で立ちが違う(前場では一般人の姿で、後場では真の姿)パターン、違う役者が演ずる違う役のパターン(あんまりない)とある。

ちなみに、能面をつける可能性があるのはシテ方能楽師が演ずるシテとツレのみで、つけないこともままある。

ツレ

主役のお供。シテ方能楽師が演ずる。

ワキ

脇役。ワキ方能楽師にはしもがかりほうしょう ふくおう たかやす下掛宝生・福王・高安の三流派が現存。能面はつけない。

ワキツレ

脇役のお供。ワキ方能楽師が演ずる。

子方

子どもが演じる役どころ。曲によって、必ず子どもが演じなければならない役がある場合がある。大人の能楽師がみんな低い声を出している中で声が高く澄んだ声を出してくれるのでとってもキレイでドキドキするし目が覚める。

アイ/間

狂言方がつとめる役どころ。多いパターンとして、複式能で前場と後場の間に「所の者」(その地域に住んでいる一般人)として出てきてワキの旅僧に出くわし、ワキに促されるまま前半のストーリーに関連する解説や補足説明(名所の云われを説明することが多い)を行い、後場の進行をほのめかしたりしなかったりして去っていく。特に新しい情報が明かされないことも多いので冗長に感じるかもしれないが、この時間は一旦幕の中や作り物の中に引っ込んだシテが人間の装束から亡霊やら神やら真の姿の装束・面に着替える時間としてとても重要。

じうたい 地謡

シテ方能楽師が担当するコーラス隊。一度に6~12人登場し、舞台右手の地謡座に2列に座る。**地頭**といって、全体の音や調子やスピードをリードする人は、後列の真ん中に座る。

こうけん 後見

舞台の進行をじっと見守る人。演者の装束が崩れたのを直したり、大道具を設置したり、小道具を演者に渡したり回収したり、はたまた演者のセリフが飛んだら小声で言ってあげたり演者がぶっ倒れたら緊急代役として舞ったりと、役割は様々。でもおおかたは座っているだけ(に見える)。

囃子方

笛（能管/龍笛）

囃子の中で唯一の旋律楽器。「ノド」と呼ばれるつくり（管の中にあえて挿入された道ふさぎ）によって、他の楽器にはない独特な音色が生み出される。めちゃめちゃ高い音を出すとき、その音は「ヒシギ」といって亡霊や神など超自然的人物の登場や大雷などの超自然的現象が起こることを示している。

小鼓

いわゆる「鼓」。舞台上で打面に息をハァーっとかけたり唾液をつけたりする姿が見られるが、これは美しい低めの音色を出すには湿気が欠かせないため。紐を締めたり緩めたりして微妙に音を調整している。

大鼓

小鼓の柔らかい音とは対照的に高く硬い音。こちらは湿気が大の苦手、演奏前には皮を炭で焙じる。

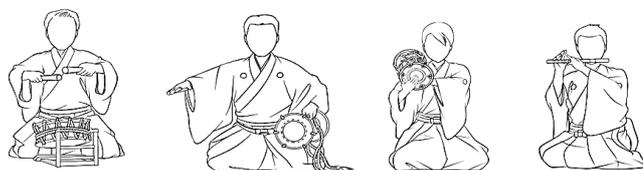
太鼓

左右の撥でリズムを刻み、拍子をリードする楽器。笛・大鼓・小鼓とは異なって入らない曲も多く、神や鬼が登場する演目に限って入る。

この4つの楽器を合わせて「四拍子^{しびょうし}」と呼ぶ。打楽器奏者は鼓を打ちながら「ヤ」「ヨーイ」などと掛け声をかけ、これによって間合いを取り、演奏の位置やスピードを知らせあっている。

鼓後見

大鼓と小鼓の後ろに一人ずつ人が控えることがある。鼓方は椅子に座って演奏する場合も多いが、そのような時に椅子を組み立てる手伝いなどをし、あとは後ろでただ座っている。



※左から、太鼓、大鼓、小鼓、笛

能の構成要素

前場

複式能(二場構成の能)の前半部分。

後場

複式能の後半部分。

各小段

クリ

サシ、クセに続いてゆく導入歌の部分。

サシ

クセの前などに置かれる短い心情表現の部分で、特に節はつけないセリフ。

クセ

能を構成する部分の一つ。シテにまつわる物語や心情表現が行われることが多い箇所。立って舞いながらやることが多いが、座ったままただ語って謡を聞かせるだけの場合は居グセという。

ロンギ

登場人物同時、または登場人物と地謡が交互に一節ずつ謡い、盛り上がる部分。参加している謡い手同士が一体化してゆき、もはや現実的には誰が喋っているべきセリフなのかわからなくなってくる。例えば、『葵上』という演目ではシテである六条御息所の生霊を退散するためにワキが唱える呪文を、シテ自身が一部唱えることになっているなど。

上ゲ歌

高い音程からはじまる和歌の部分。

下ゲ歌

低めの音程からはじまる和歌の部分

キリ

能の最後の部分。夢幻能で、亡霊であるシテが成仏する様子を描くことが多い。特に見せ場になりやすい箇所である。仕舞はこの部分から取られることが多い。

仕舞について

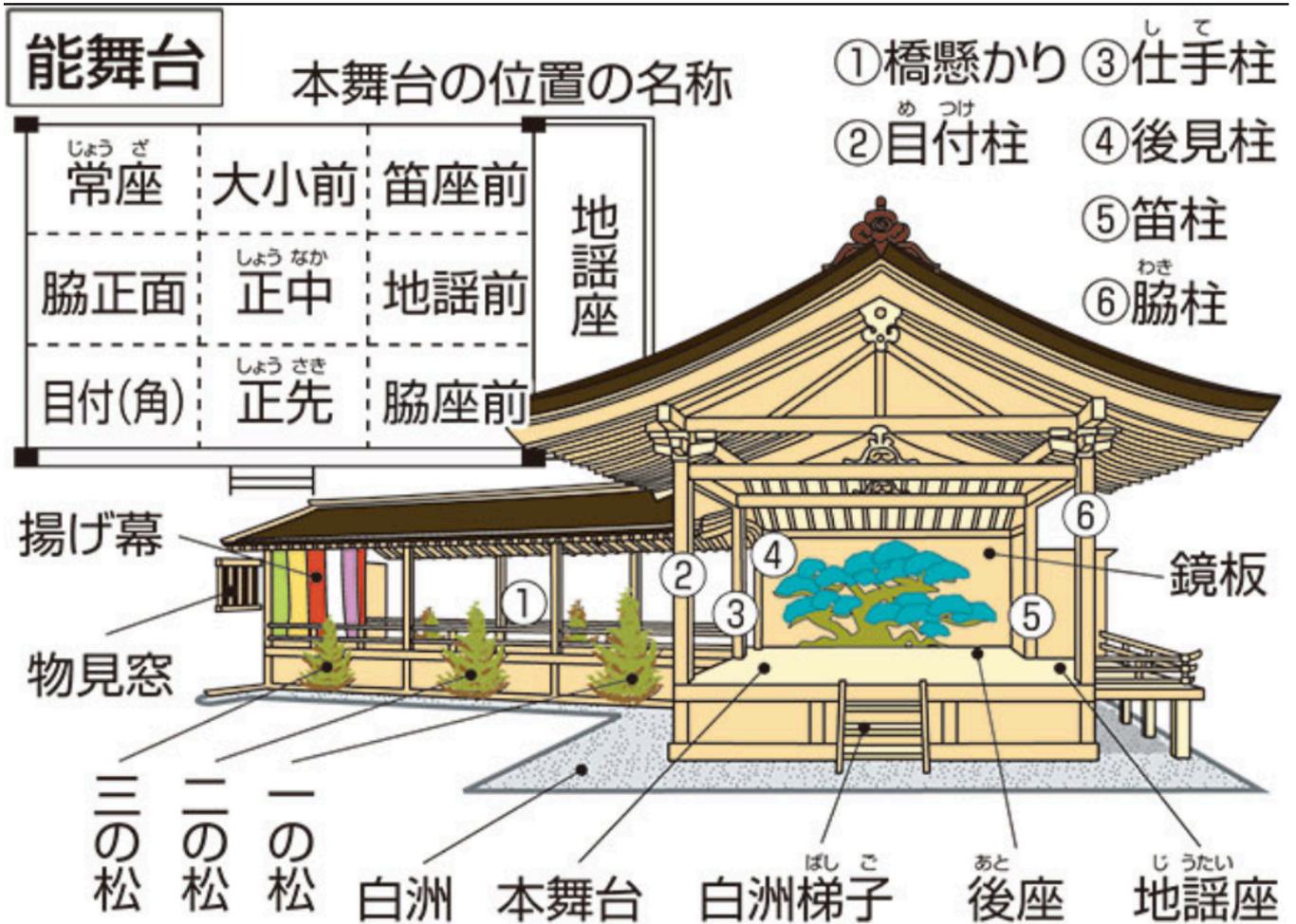
しまい 仕舞

能の上演形式の一つ。能を丸々一演目上演することは人手や装束、時間の問題からみて大変な大事となるため、能の中でも特に見せ場となるところだけを切り取り、シテ方の舞と地謡のみで演じるダイジェスト版。面はつけず、紋付・袴を着用し、扇以外の道具は用いないことが多い。能楽師は、仕舞はたったの5分程度で終わるけれど、能を丸々一演目(1時間くらい)上演するのと同じ価値だから、観客に能を見たのと同じだけの印象を与えなさいと師匠に言われて稽古するらしいです。

まいばやし 舞囃子

仕舞の一種。シテ方の舞と地謡に加え、囃子も参加した、ダイジェスト版の上演。

能舞台の構造



演技スペースと柱

① 橋懸かり (橋掛り)

鏡の間と本舞台とをつなぐ廊下。本舞台からまっすぐ横に伸びているわけではなく、若干後ろから前にせり出している。

○一の松・二の松・三の松：松は正式には3本だが、小さな能舞台(ex. 鎌仙会能楽研修所)では2本のこともある。登場人物が本舞台に行く前に立ち止まって名乗りをあげたり、帰る時に舞台を振り返るために立ち止まったりする、その目印になっている。

○鏡の間：揚げ幕の向こうにある空間、いわゆる舞台袖で、姿見用の鏡がある。〈翁〉という特別な演目を上演する前には、ここで翁面に対して儀式が行われる神聖な空間。

○アイ座：一の松の奥は、間狂言が出番の前後に座って控える場所である。

② シテ柱

シテの主な立ち位置であるシテ座(常座の中央あたり)に近い柱。

③ 目付柱

シテ方は面をつけると視界がほとんど失われ、遠近感も奪われて、地面も見えていない。そこで、この柱を目印にする。例えば、脇座前→目付(角)へ向かう動きが舞の一つの型としてあるが、その時にこの柱がないとシテはどこまで進めば良いのか把握できずに白洲へ落っこちてしまう。

④ 後見柱

後見座に近い柱。

⑤ 笛柱

笛座に近い柱。

⑥ ワキ柱

ワキの主な立ち位置であるワキ座(脇座前の中央あたり)に近い柱。

囃子座・地謡座

笛座

笛方が座る場所。

小鼓座

小鼓方が座る場所。

大鼓座

大鼓方が座る場所。

太鼓座

太鼓方が座る場所。

後見座

囃子方ではないが、後見が座るところ。太鼓座の後方にある。

鏡板

本舞台の背景にある、松が描かれた板。なぜ松が描かれているのはについては諸説あるので興味ある人は調べてください。

地謡座

地謡が座るところ。通常6～12人で2列に座る。ちなみに狂言で地謡が登場する場合(あんまりない)、地謡は囃子方の後方にある^{あとざ}後座に横並び一列に座る。

本舞台の位置

じょうざ 常座

特に常座の前の方、登場人物が名乗りをあげる場所を名乗り座という。

だいしょうぜん 大小前

大鼓方と小鼓方が座る場所の前方。

笛座前

笛方が座る場所の前方。

脇正面

客席の脇正面席から見た場合の舞台正面方向。

しょうなか 正中

舞台の中心。大小前と正中の間あたりの天井には、『道成寺』という演目でのみ使われる作り物の鐘を吊るす滑車が常時取り付けられている。ちなみに、切戸の付近にもこの鐘の紐引っ掛けるための輪っかがある。

地謡前

地謡座の前方。

目付

目付柱の近く。

しょうさき 正先

舞台の正面中央部、白洲梯子があるあたり。

脇座前

ワキ座のあるところ。

白洲梯子(階)きざはし

正先にある階段。江戸時代くらいまでは演出で使っていたらしいが現在は一切使わない。しかし舞台構造の一つとしては未だに残っている。

きりど 切戸

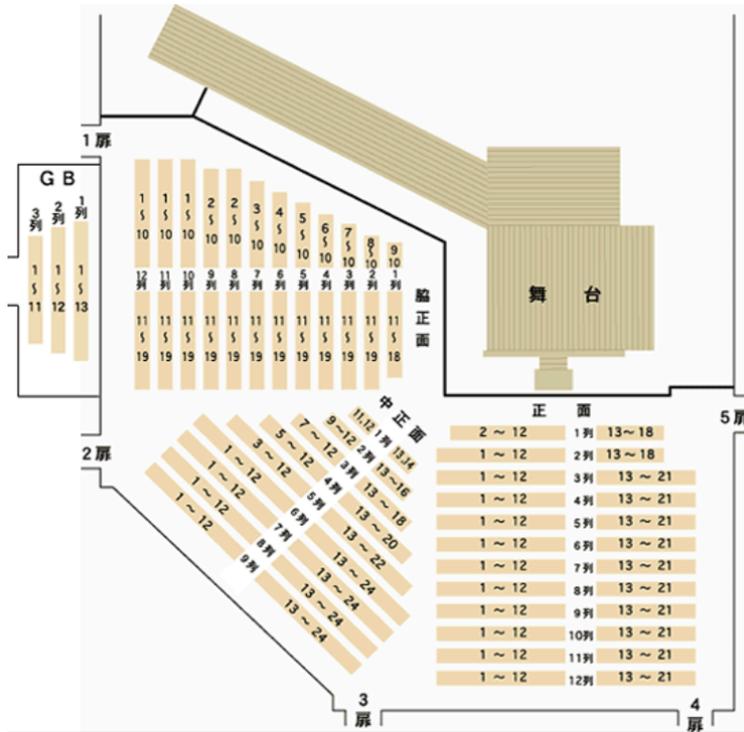
地謡や後見が出てくる戸。

あげまく 揚幕

役者と囃子方が出てくる幕。能舞台には、歌舞伎や現代演劇の舞台のように舞台全体を客席と隔てる幕が存在しない。

客席

通常、客席は3種類に分けて販売される。値段は正面>中正面≧脇正面だが、能狂言はどこに座っても楽しめるように作られており、それぞれ全く違った楽しみ方ができる。



※国立能楽堂の座席

正面

舞台全体を俯瞰できる。

中正面

目付柱が視界の邪魔になるという欠点があるが、斜めから立体的に把握できる。

脇正面

舞台を真横から見る。揚幕の上がり下がりが見えないので、視界の左端にいつのまにか音もなくすり足で登場してくる役者にドキドキできる。画像の通り、国立能楽堂には脇正面後方にGB席と言ういわゆる学生席が設けられている。

※青山の鍬仙会能楽研修所は小さな能楽堂で、入り口で靴を脱ぎ、畳の段々に座布団を敷いて座るのでのびのびできる(大きなところでは普通の劇場のように靴履いたままで椅子に座る)。中正面がなく、正面と脇正面が直角に交わっている。

その他諸々

- ・能が始まる 5 分前くらいになると、揚幕の中から囃子の音が聞こえてくることがあります。**お調べ**と言って、楽器のチューニング時間であると同時に、開演前のベルの意味を持ちます。
- ・演目は急に終わります。急に静かになって、シテが揚幕の方を向いて歩き始め、「あれ、終わったのかな？」と思ったところで終わりです。
- ・初めてだと拍手のタイミングに戸惑うと思いますが、通常、役者・地謡が全員はけて、囃子方が退場し始めたくらいで拍手が起こることが多いです。舞台上にいる人たちは順次ゆっくりと退場していくので空白の時間が結構長く続き、焦らされている感じもしますが、余韻として面白い時間だと思います。
- ・能楽師は家系でなる人ばかりでなく、大人になってから能楽師を志してプロになる人もいます。能楽師人口不足解消の一手段として、三年に一度、国立能楽堂で能楽三役(能シテ方ワキ方・狂言師・囃子方)養成コースが開講され、プロになることを条件に無償で研修を受けられるという道があります。
- ・女性能楽師は普通に結構いますが、女性狂言師は和泉流の宗家に 2 人(姉妹)しかおらず、現在はほとんど活動もしていません。